

2017年1月29日(日)

「新春『府中寄席』桂 扇生の落語会」

恒例となりました、新春「府中寄席」。

第9回の今年はお馴染みの桂 扇生さんの登場です。

寒い時期ではありますが、当日は穏やかな陽もさす絶好の落語日和。

落語会としてはこれまでで一番の大入りとなり、多くの方々にお楽しみいただきました。

演目は「厄払い」と「ねずみ」です。



「厄払い」

当時は節分の晩に厄払いをしてもらう習わしがありました。

昔の暦ですと立春と新年がほぼ一致していたようで、節分の晩は年越しの晩もありました。その年越しの晩、厄払いをしてひと稼ぎしようと思った与太郎さんの噺です。

枕の部分で今時の節分の話をあれやこれやされる扇生さん。

「若い時分、節分に原宿の東郷神社で仕事があつてね。てっきり豆をまくのかと思つたら鬼のお面を、はいこれって手渡されて。」

「年の数だけ豆を食べるのも近ごろは大変ですよ。胃薬と一緒に食べています。」

文字にしてしまうと味気ないのですが、そこは芸の力と申しましょうか、何とも面白可

笑しく、引き込まれていくのです。



扇生さんの本見つけました！

・『大研究 落語と講談の図鑑』国土社
(児童書。中央図書館、白糸台図書館に所蔵)

＊落語会で紹介されました＊

・『だから、一流。才能とは継続する力。
成功の裏には、10倍の失敗がある。』

学研

(中央図書館、武蔵台図書館に所蔵)

「ねずみ」

彫り物の名人、左甚五郎が登場する噺です。旅の途中、仙台の街に入り宿屋に泊まるのですが、これがとんでもないボロ宿屋。前払いで、布団も料理もその場で調達という有り様。しかし、これには訳がありまして……。

甚五郎はその話に同情し、一肌脱いでねずみを彫り主人親子を助けます。下げのねずみの言葉に、おもわずなるほど！と膝を打ってしまいました。悪い奴をギャフンと言わしめるのですが、懲らしめない。笑いに变えて、気持ち良くめでたしとなるわけです。お客さまからも「ねずみ、本当に笑いました。」「小さい子どもも楽しそうに笑っていた。すごいな！！と思った。」などたくさんの声をいただきました。

「あまり声をだして笑う事が少ない毎日。今日は大笑いしました。」とのご感想もいただきました。

“笑う門には福来る”と申します。

どなた様にも、今年1年良い年でありますように。